

一瓣の疵つき開く辛夷かな  
等が推されるといふ状態となつてゐる。

昭3・6「ホ」

秋桜子が、かうした状態を、「現今のように技巧がなくては駄目だ。あれなら二三年修行すれば皆同じになつてしまふ」(前出)と考へ、それに抗するために千葉調を試みたことは、先出の文に示した通りであるが、誓子にあつても、「過去の俳句は『素材』と『表現様式』とに於て貧困といふことであつた。作家は所謂伝統俳句的素材と所謂俳句表現様式とによつて自らを縛りつけ、どうにも動きのとれないものにしてゐる」(俳句は夜盲症に罹つてゐる。俳句に光を)「私の句作に於ける努力は、素材と表現様式との二方面に向けられた。素材に就ては『ありきたりのもの』を撻発する意味に於て『ありきたりでないもの』を。表現様式に就ては、みすばらしくも、偏狭なる『俳句的表現様式』を撻無する意味に於て『新しき表現様式』を、時に短歌の表現様式を」(句集『凍港』のことども)昭7・6 かつらぎ」と記して、偏狭なる俳句的表現様式(描写主義的作風を指してゐた)に抗したことを明らかにしている。

そして、実際問題として、先記のやうな描写主義への偏向に対して、先づなされねばならなかつたことは豊かな感情世界の回復であり、現実人間の内面をさながらに打出すといふ試みでなければならず、誓子・秋桜子がそこに力を注ぎ、それが俳壇の論議の対象となつていつたことは、見方によつてはむしろ当然のことであつたといへよう。それに、秋桜子の流れから楸邨・波郷が出、誓子の流れから三鬼・不死男・多佳子などが出たといふことも、この抒情(広義の)の回復といふ試みが、近代俳句への重要な基礎となつたことを

示してゐるのであつて、そこからも万葉調——昭和俳句に關はつた万葉集——の意義といつたものを考へることが出来さうである。

このことを、万葉集に即していへば、昭和俳句に關はりつゝ、そこに豊かな感情世界を回復せしめる強い働きかけをもつたといふことなのであつて、それはそのまゝ、万葉が真の古典であることを示してゐるのではなからうか。

註① 『吉野の鮎』高木市之助博士著 昭16・9 岩波書店刊 一三四頁、三五三頁。

② 大正十一年四月 二人が出会つてからは、東大俳句会でも親しく交はり、(山口誓子論)秋桜子 昭3・6 ホトトギス、『高浜虚子』同上 昭27・12 文芸春秋新社刊、「回想の秋桜子」昭12・9 俳句研究)、俳句上の試みも同じ方向を辿らうと(句集『凍港』のことども)昭7・6 かつらぎ)したやうである。

③ 佐々木信綱博士著「万葉辞典」に拠つた。以下同。

④ 『日本文学の環境』高木市之助博士著 昭27・5 四十九頁。

⑤ この諸作の特性を挙げる根拠を、当時、誓子が心掛けた諸点が示されてゐるといふ点に置いた。文芸上の規準によるものではない。

⑥ 「ホ」は「ホトトギス」の略、「京」は「京鹿子」の略。

## 和泉式部縁起について

大 橋 清 秀

誠心院所蔵和泉式部縁起は上下二巻紙本着色の絵巻である。天地三二・五センチ、下巻の奥に、

泉涌寺末寺誠心院泉式部

縁起彼院主歎二旧記之陵夷一勗二營福

之門戸一新畫繪了仍一覽之次感二彼志一

染二鬼毫一者也

寛永廿季小春下旬

戒受菴

肆陰虔眞書焉

(歎糸)

(朱印)

とあり、山城名勝志卷四によれば、誠心院は「号二小御堂、元在三一条、北小川、隣二誓願寺二也、近世誓願寺遷三三條之時、同遷彼寺南、俗云二和泉式部寺、今律院為二泉涌寺末寺、」とあつて、誠心院々主向井俊恭氏のお話によると、戒受菴は無尊光院良純法親王、知恩院門跡第一代、以心庵ともいひ、寛文九年八月一日新善光寺(泉涌寺塔頭)に居られたとのことである。この奥書によれば寛永廿年の春には誠心院蔵和泉式部縁起が出来て居り、「歎旧記之陵夷」とあるところから、これと全く同一のものか、或は詞章のみのものか、寛永廿年以前に既にあつたと思はれるのである。しかしながらそれがどのやうなものであつたかはわからない。今は向井俊恭氏の御厚意により、誠心院蔵和泉式部縁起を出来る限り原文に忠実に翻刻することにとめた。原文の変体仮名は現行の平仮名に、異体漢字は一部を除いて現行の漢字に改めた。尚漢字はもとの書体に近い正字体と略字体とをそれぞれ用いた。難読の箇所には傍線を施し、( )に入れたものは私の註記である。次に誓願寺縁起との關係について触れて置き度い。前に記した山城名勝志によつても明らかやうに、誠心院は誓願寺に古くから隣接し

てゐて関係浅からぬものがあつたやうである。そこで統群書類従卷第七八三所収の洛陽誓願寺縁起と比較してみると、

和泉式部縁起	花の春のあした月の秋の夕おり／＼のおもひを述てあかしくらし給けるか	誓願寺縁起	花の春の朝月の秋のいふべ。おり／＼のおもひをのべ。光陰をおくりしが。
彼性空上人は年来法華讀誦の功つもりて六根淨を得給ぬれば此人と都より尋來へきことをかねてしらせ給て御弟子達にの給やう	青柳の糸たをやかなる女房の中にも妙なるよそほひなるか道の邊の露にうちしほはれたるありさま見るめもあやなるすかたにて物申さむと坊の門をそたゝかれける	性空上人は多年法華修行の功つもり。六根清淨を得たまひし故に。彼の宮女都より尋ね來るべき事かねてよりしろしめされて。御弟子達に告たまひけるは。	扱いづみ式部は容顔美麗の玉貌。楊柳のいとたおやかなる有さまも。道のべの露霜にうちしほれ。見る目あやなき風情にて。上人のあんしつに尋よりもの申さんと云ながら。柴の戸ほそをたゝきけり。
女房たちしはらくたゝすみ給ふ程に日すてに西の山のはにかくれ入逢の鐘もこゑ／＼に諸行無常をつけわたりあらしのことゑはおりに／＼に是生滅法をおとろかすさて深々たる僧坊には人跡かすかにして尾上の鹿の音信や垣根のむしのひとこゑまでもこゝろすみゆく室のうちには寂寞無人聲讀誦此經典の覺鐘のひゞきのみを聞えける猶たちよりて門をたゝけとも開ことなければ門前のつゆに袖をかたしきつゝ松のひまもる月影のほの／＼と見えしをなかめてかくそ思つゝけ給ける	女房達ともろともに暫く門外にたゝずみしが。日既に西の山の端にかくれ。入あひのかねこゑ／＼に諸行無常のひゞきをなし。峰のあらしは実にもいま飛花落葉をしめしつゝ。しかのなくねもすさまじく。垣根の虫のかなしむ声。心もすめる折ふしに。深々たる庵室の寂寞無人讀誦此經典のたへなる御声聞えければ。又立よりて門をたたけども。更にことふる人なければ。力およばずたちかへり。露に袖をそぼちつゝ。まつひまもる月影のほの／＼見へしをうちながめ。一首をこそは詠じけれ。		

これによつてわかるやうに、和泉式部縁起は誓願寺縁起の影響を受けてゐると考へられる。和泉式部縁起独自の叙述もあるが、事柄や語句

の類似もはなはだ多い。和泉式部縁起の筆者は誓願寺縁起を典故として作つたものと考へられる。そして一部分ではあるが、謡曲誓願寺の影響も受けてゐると考へられる。

和泉式部縁起	かゝりける所にその様ゆうなる女人すゝみ出て申やう此御札の面に南無阿弥陀仏六十万人決定往生とみえたり是に尤不審あり御札にのせられたる六十万人は決定往生疑あるへからすさて其外の衆生は往生にもるへしや上人答て曰是は御熊野の御示現に六字名号一遍法十界依正一遍躰万行離念一遍證人中上と妙香花と云四句の文あり此文の上の字はかりを札の面にあらはせり	謡曲 誓願寺	(シテ里の女、後シテ和泉式部の靈)この御札を見奉れば。六十万人決定往生とあり。扱々六十万人より外は往生に漏れ候ふべきやらん。返す。も不審にこそ候へ。(ワキ一遍上人)実によく御不審候ふものかな。これは三熊野の御夢想に四句の文有り。其四句の文の上の字を取りて。証文のために書きつけたたり。たゞ決定往生南無阿弥陀仏と。此文ばかり御頼み候へ。(シテ)さて／＼四句の文とやらんは。如何なる事に有るやらん。愚痴の我等に示し給へ。(ワキ)いで／＼語つて聞かせ申さん。六字名号一遍法。十界依正一遍躰。万行離念一遍証。人中上々妙好華。此四句の文の上の字なれば。六十万人とは書きたるなり。	誓願寺縁起	或曰參詣群集の中より優なる女人上人のまへにすゝみ申けるは。授給ふ符を見奉るに。六十万人決定往生とあり。然らば其外の衆生は撰取の利益に漏べきや。上人のたまわく。弥陀の悲心無尽にして。横にわ十方を究め堅には三世を尽し。善惡一切の凡夫乃至三塗重苦の衆生迄普く濟ひます広大無辺の誓願なれば。いかで六十万人に限るべき。但此身(符カ)の文は。神詔の四句の偈一字づゝをつんで証明の為に題するのみ也。
--------	---	--------	--	-------	--

しかし次の如く謡曲誓願寺にくらべて、誓願寺縁起との関係の方がより深いと考へられる場合も見られるのである。

和泉式部縁起	上人奇異の思をなし其名を尋たまふに化女の云あれにみえたる御堂は八曼陀羅堂とも申又御堂閑白建立たるによりて小御	謡曲 誓願寺	(ワキ)そも御本尊の御告とは。御身はいづくに住む人ぞ。(シテ)わらはが住家はあの石塔にて候。(ワキ)不思議やなああの石塔は。和泉式部の御墓とこそ聞	誓願寺縁起	上人きどくのおもひをなし。扱女房はいづくの人にて名はいかにと訪侍るに。女房の曰。あれに見へさふら御堂は八曼
--------	--	--------	---	-------	---

堂とも号してみつかからか往生せし室也其  
いにしへにすむ水のふかき縁とて今もま  
た和泉式部とは申侍るなりとて石塔の邊  
にたちよりあともなくうせ侍りぬるとな  
む

きつるに。御住家とは不審なり。(シテ)  
さのみな不審し給ひそよ。我も昔は此寺  
に。值遇の有れば澄む水の。春にも秋や  
通ふらし。(地) 結ぶ泉の自が。名を流  
さんも恥かしや。よしそれとても上人よ。  
我が偽は亡き跡に。和泉式部は我ぞとて。  
石塔の石の火の。光と共に失せにけり

陀羅と号し。又御堂の関白御建立なれば  
小御堂とも称す。是我往生せし室なりと  
いひ捨て。いづちともなくうせ侍りぬ。

私の関心は和泉式部縁起の文学的価値の有無にあるのではなくて、和泉式部その人とその歌が、後世の人々にいかに享受されて来たかといふことにある。ここに和泉式部縁起を翻刻する理由もあるのである。他に述べるべき事も多いが、別の機会に譲りたい。  
御指導いただいた清水泰先生、御示教いただいた田中重太郎先生はじめ柿谷雄三・池田勇両氏、御助力いただいた森本修氏に御礼を申し上げるとともに、向井俊恭氏の御厚意に対して重ねて御礼申し上げる。

【翻 刻】

和泉式部縁起

「和泉式部縁起 上」(題簽)

抑一條院の御宇藤原氏女和泉

式部といひし(切り継ぎあり)雲井のうちにし

て花の春のあした月の秋の夕

おり／＼のおもひを述てあかしくら

し給けるかやう／＼身のさかりも

すきて老の坂ちかつくまゝに後世

もこゝろくるしく覚えてつら／＼

世中の常なきことを思へは生老

病死のことはり有為轉變のならひ

は獨としてのかるゝ者なし彼楊貴

妃李夫人も名のみこそ今は残侍

れかゝることほりをけふは人の上に

聞あすは身のうへにそきかまはしか

なくあたなる心かなとおもひそめ

しより浮世のまははり物うくて

1

5

10

15

同じ心さまに色このみなる女房これ  
かれともなひて播州書寫山の性空  
聖人に参りて後の世のことを尋御  
法のをしへをうけむとてはる／＼  
とそくたり給ける

(絵) (第一回)

20

秋もなかはの山々は紅葉の錦色々  
にしくるゝ雲もたちそふや九重の  
うちを立出て淀のわたりにこそつ  
き給へいつしかなれぬ旅衣袖ふき  
しほる秋かせもうき世をいとふた  
よりとやいとゝ身にしむこゝちして  
かりのやとりのいた間よりもり来る  
月のさやけさは秋の夜のなつき闇  
路をてらすかとおもひなそらへつゝ

5